

2025 年 6 月 22 日 市川福音キリスト教会（詩篇 143 篇 1～8 節）

私をさばく方は主

I コリント 4 章 1～5 節

はじめに

I コリントの 3 章までのところに耳を傾けて来ました。ここまでのところでは、パウロやアポロのような教会の働き人が「何でないか」が語られていました。彼らは神の畑の奉仕者であって、教会を成長させてくださるのは神でした。彼らは神の建物としての教会の土台ではありません。土台はイエス・キリストでした。ところが、今日からの 4 章では教会の働き人が「何であるか」が語られます。

1、 神の奥義の管理者（1～2 節）

1～2 節「人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」

教会の働き人は、教会の開祖や土台ではなく、教会を成長させる神の奉仕者に過ぎないと教えて来たパウロは、ここで、その奉仕者、神のしもべとしての役割を語ります。それは「神の奥義の管理者」であると言うのです。

奥義はミステリーオン、ミステリーの語源です。教会のしるしの中心には神のことばと聖礼典があります。神のことばと聖礼典は、キリストの福音を指示します。ですから奥義とはキリストであると言えます。教会の働き人はキリストの福音の管理者です。そして管理者に求められるのは忠実さです。

キリストの福音につけ足したり削ったりすることなく、独自の見解や解釈を加えるのではなく、聖書に忠実に十字架と復活、信仰による義、恩寵としての救いの教を説くことです。

異端と言う字は端が異なると書きますが、端々が異なるのはそれほど問題ではありません。洗礼を浸礼でするか滴礼でするか、教会の運営を牧師がするか、長老会や役員会でするかというようなことは大切なことですが、それぞれの教会の個性でよいことです。異端とは福音の中心が異なるのです。イエス・キリストが救い主ではなく、別の救い主がいるとか、聖書ではない別の経典があるとか、これは異端です。

ガラテヤ 1 章 8～10 節「私たちがあれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのよ

うな者はのろわれるべきです。私たちが以前にも言ったように、今もう一度、私は言います。もしだれかが、あなたがたが受けた福音に反する福音をあなたがたに伝えているなら、そのような者はのろわれるべきです。」

教理は正しくても、牧会の仕方がカルトであるということもあります。カルトの特徴は、恐れによって支配すること、判断を停止させること、指導者に絶対服従させることです。牧会の目標は、「キリスト者の自由」を身に着けることです。

「キリスト者は、あらゆるもの、最も自由な主であって、何もののにも隷属していない。キリスト者は、あらゆるもの、最も義務を負っている僕であって、すべてのものに隷属している。」

言い換えると、神にある良心をめざめさせることです。良心によって神に従い人に仕える人となることです。

教会は教会の働き人のものではなくキリストのものです。忠実な働き人は、自分に都合のよい信徒を育てるのではなく、目ざめた良心をもって「キリスト者の自由」によって生きるクリスチャンを育てます。

教会の働き人は、神の目を気にすべきであって、人の目を気にすべきではありません。パウロは言います。

2、 人の評価を気にしない (3 節)

3 節「しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。」

ここで「人間の法廷で」というところは、直訳すると「人の日によって」であると脚注にあります。3 章の 13 節には「それぞれの働きは明らかになります。『その日』がそれを明るみに出すのです」とありました。人が意識すべきは神のさばきの日、神の法廷であって、人の日、人間の法廷ではないのです。

牧師になりたての頃、先輩の牧師がⅡコリント 6 章 8 節の言葉を引いて証されたのを心に留めています。「また、ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです」という言葉です。このような先輩でもそうなのだと思って励まされました。

パウロは人のことなど気にしない傍若無人な人ではありません。人の気持ちがわかる人です。そしられるよりほめられたい、悪評を受けるより好評を博したいと思う、普通感覚を持っていました。けれどもそれに支配されてはいま

せん。そういう強靱な心を持っています。

今の人は、傾向として、人を責めるのも、人から責められるのも苦手です。とても打たれ弱いと思います。必要以上に自分で自分をさばくということをしがちかもしれません。そんなことを思うと、パウロの言葉は、大切な示唆を与えてくれるのではないのでしょうか。

「私にとって人の評価は、無視するとは言いませんが、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。」

特に日本人は、神を基準に自分を見るのではなく、人と比較して自分を見る傾向が強いので、神さまの前に生きることで、人の目から解放されると思います。

ここでパウロが、自分をさばくことさえしない、ということは自分に甘いということではありません。彼は誰よりも自分に厳しい人でした。彼は厳しく自分を見つめて言うのです。

3、私をさばく方は主です（4～5節）

4節「私には、やましいことは少しありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。」

「私には、やましいことは少しありません」、これは良心に責められるところがない」という意味です。直訳すると「なぜなら、何一つ自分自身について共に知ることがない」と書いてあります。「共に知る」という動詞が名詞になると「良心」という言葉になります。

パウロは、私は良心がとがめるようなことを何一つしていないと言うのです。なかなか言えることではありません。

ネイティブ・アメリカンの人たちにこんな考え方があると聞いたことがあります。良心は心の中にある三角形のようなもので、若い頃はそれがくるくる回ると尖ったところがぶつかって痛みを感じるけれど、くるくる回っているうちにだんだん角が取れて、何も感じなくなるというのです。

パウロは良心の目覚めた人です。そんな彼が、良心にとがめはなくても、それで義と認められているわけではないというのです。人と比べれば良い方かもしれない。しかし神の前には、それで義と認められるわけではないのです。

パウロは「私をさばく方は主です」と言って、主にさばきを委ねます。これを今日の説教題としました。

私はキリスト教の家庭に育ったので、そういうことはありませんでしたが、昔は、嘘を言うと閻魔さまに舌を抜かれるよ、見たいなことを言われて、育て

られたのではないのでしょうか。仏教では火の池、針の山で苦しむ餓鬼たちの「地獄絵」を見せて民衆を教化してきたわけです。しかし、そういうこともなくなりました。中学校の先生が、山口のおじいさんが「最近の人間は神を畏れるということがない」と言っていたぞ、と言ったことがありました。今の時代は、神を恐れなくなった時代であると思います。神のさばきを恐れてビクビク生きるのも嫌ですが、神への恐れがないのも問題です。

キリスト教の場合、「私をさばく方は主です」と弁えることは、さばきを恐れさせるためではなく、むしろ安心して善い生き方をするためです。

今、元イスラエル軍兵士ダニー・ネフセタイさんの平和の講演を本にしています。イスラエルの男の子の夢は戦闘機のパイロット！お母さんも、息子がパイロットになってくれたら最高！と思っている。当時は超かっこいい！と思っていた。でも、イスラエルを離れ日本にきてみるとたくさんの気づきがあった。戦闘機は二つのことしかできない。人を殺すことと物を破壊すること。何もカッコいいものではないと気がついた。幼いころから「敵だ」と思っていたシリア人に代々木公園で会った。ケバブを焼いてナイフを持っていたけど、当然、同じ人間だった。敵という概念はつくられたもの。と、彼は家具作りの職人なのですが、このようなことを、日本中を駆け回って講演しています。

もう一冊、『戦時下の教会を知ろう 新たな戦争に巻き込まれないために』という本も作っていて、両方とも7月に出版の予定です。私も、「私をさばく方は主です」と弁えて、あきらめずに忍耐して、今を生きたいと思います。

5 節「ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」

3 章 15 節にはこうありました。「だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります」。かろうじて助かるのはありがたいですが、そもそも木や草や藁ではなく、金や銀や宝石のような生き方をして行きたいものです。

おわりに

「主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます」。それを恐れて心配して生きるのはやめましょう。神の前に罪を告白し、「神からそれぞれの人に称賛が与えられる」ことを待ち望みましょう。